第１章　石垣調査報告書作成の目的と経過

第１節　石垣調査報告書作成の目的

鹿児島城跡の石垣については，17 世紀初頭の築城以降，火災や地震等の災害など，様々な要因により修復や改築を重ねて現在まで至っている。また，その修復等には記録に残る大規模なものから，記録に残らない小規模なものや部分的な補修等までも数多く想定され，非常に複雑な状況を呈しており，その全容を完全に解明するのはほぼ不可能である。

これらの石垣について，令和３年度から５年度にかけて，現在の石積み及び各石材の観察や，文献・古文書等の資料調査等を実施し，各区間の現状に関する情報を系統的に整理した石垣カルテを作成した。その成果を踏まえ，今後の石垣の復旧（修理）を計画的かつ円滑に推進するため，鹿児島城跡石垣全体の内容把握を目的に令和５年度に石垣調査報告書を作成するものである。

第２節　策定の経過・体制

鹿児島城跡については，御楼門復元整備に伴い，文化財としての位置づけを改めて整理し，鹿児島城跡の本質的価値と構成要素を明確化し，それらを適切に保存管理・整備活用していくための基本方針を定めることを目的として，県と鶴丸城御楼門建設協議会により，平成 27 年度に「鹿児島（鶴丸）城跡保存活用計画」を策定した。

同計画においては，鹿児島城跡の本質的価値を構成する要素の一つとして「本丸，二之丸，御厩の石垣」を位置づけ，石垣修復方針や修理の際の工法選択，石垣の特徴や形態別区分など，石垣保全に関する基本的な考え方が示されている。

なお，計画策定に当たっては，鶴丸城御楼門建設協議会の元に設置された「鶴丸城御楼門等建設に係る専門家委員会」の指導・助言をいただいた。

また，鶴丸城御楼門復元整備に伴い，県が実施する石垣の保全整備に係る指導助言を目的として平成 27 年に「鶴丸城跡保全整備に係る専門家検討会議」を設置し，同会議の指導・助言のもと，石垣の保全整備に取り組んできた。

御楼門完成後の令和２年の会議において，従来，崩落や御楼門復元等，各々の事象に対処する形で石垣の保全整備を実施する形から，石垣保存の理念を確立し，計画的に石垣を管理，保全，整備していく形にシフトしていく必要性について御指摘いただいた。

そこで県では令和３年度から５年度の３年間で石垣カルテの作成を，株式会社九州文化財研究所に業務委託して行った。また，同時に専門家を招いて植物調査を行い，それらの成果を踏まえて，令和５年度に石垣調査報告書の作成に取り組むこととした。

なお，令和４年度に鹿児島城跡が国の史跡に指定されたことを踏まえ，令和５年度に新たに「国史跡鹿児島城跡保全整備専門家検討会議」を設置したことから，本計画の策定に当たっては，同会議の指導・助言をいただいた。

表１　鶴丸城御楼門等建設に係る専門家委員会（平成 26 年度～27 年度）

役職	所属団体・役職	氏名
委員長	鹿児島国際大学短期大学部名誉教授	三木　靖
委員	鹿児島県立図書館長・志學館大学教授	原口　泉
委員	尚古集成館長	田村　省三
委員	鹿児島県立短期大学生活科学科教授	揚村　固
委員	鹿児島大学法文学部教授	渡辺　芳郎

表２　鶴丸城跡保全整備事業に係る専門家検討会議（平成 27 年度～令和４年度）

役職	所属団体・役職	氏名
委員長	鹿児島国際大学短期大学部名誉教授	三木　靖
副委員長	鹿児島県立図書館長・志學館大学教授	原口　泉
委員	佐賀大学全学教育機構教授	宮武　正登
委員	筑波大学大学院人間総合科学研究課教授	松井　敏也
委員	鹿児島大学法文学部教授	渡辺　芳郎
委員	鹿児島大学名誉教授	大木　公彦
委員	鹿児島大学名誉教授	北村　良介
委員	環境カウンセラー（元鹿児島県立埋蔵文化財センター所長）	寺田　仁志

表３　国史跡鹿児島城跡の保全整備に係る有識者会議（令和５年度）

役職	所属	専門分野
委員長	鹿児島国際大学短期大学部名誉教授	三木　靖
副委員長	滋賀県立大学名誉教授	中井　均
委員	鹿児島大学法文学部教授	渡辺　芳郎
委員	鹿児島県立明桜館高校教諭	林　　匡
委員	鹿児島大学法文学部准教授	小林　善仁

また，石垣については，高瀬哲郎（石垣技術研究機構），市川浩文（佐賀県文化・観光局文化課文化財保護・活用室），植生調査については，寺田仁志（元鹿児島県立埋蔵文化財センター所長）から個別に指導・助言をいただいた。

第２章　鹿児島城跡の地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

鹿児島城跡は，鹿児島市街地を取り囲むシラス台地の南端部の築かれた中世山城である上山城跡を近世に整備・拡張した「城山」地区（山城部分），その南東面の麓にある近世の「屋形（居館）」地区を中心とし，南の俊寛堀，北の吉野堀，東の鹿児島湾に囲まれた「屋形」（居所）の周囲には，重臣の武家屋敷や御厩等の施設が広がっている。

鹿児島市は市街地を取り囲むように標高約400m～100m前後のシラス台地が連なっており，その台地の間を河川が浸食し，海岸部に小デルタを形成している。「城山」は市街地の西側に広がる台地が，南側の甲突川と北側の稲荷川に浸食されることにより形成された台地の南端部に位置している。城山は城山層といわれる基盤層の上にシラスが堆積して形成されており，標高は約100mである。居館は城山の南東面に作られ，標高約10mである。

第２節　歴史的環境

（１）江戸時代前期の鹿児島城

鹿児島城跡は，慶長６年（1601）頃に築城が開始されたと考えられる。島津氏第18代当主で後に初代薩摩藩主となった島津家久は，島津義久，島津義弘との協議を経て本拠としてきた鹿児島に内城に代わる城を築くこととし（「慶長五年五月廿五旧　島津維新書状」『鹿児島県史料　旧記雑録後編３　1113号』），上山城を利用しつつ，麓に新たに方形居館である屋形（居館）を加えて鹿児島城を築城した。

近世初期の鹿児島城は，上山城または鹿児島城（藩内では御内城）と呼ばれ，山城と麓の屋形（居館）からなっていた。慶長期には，藩主の屋形（居館）は麓に置かれ，上山城には番所が置かれることとなるが（鹿児島大学玉里文庫「文政五年鹿児島鹿児島城絵図」），大手口は城山に通じており，依然として上山城が城の防御の中心であった。鹿児島城は，慶長末頃に一応の完成をみるが，寛永16年（1639）に麓の殿舎が増改築され（「七月廿八日　鑑法書状」『鹿児島県史料　旧記雑録後編６　48号』），天和３年（1683）には二之丸作事（鹿大玉里文庫，「古記-天和３年12月17日条」）が行われるなど，元和～寛政年間にかけて殿舎や御屋敷の増築，補修が続けられた。また，石垣の修補や堀の浚渫も行われている。

江戸時代前期の城の認識については，宝暦６年（1756）「鑒察使問答抄上」（『鹿児島県　史料通昭録１「鑒察使答問抄」』）によれば，「鹿児島城は山城で，山城には本丸・二之丸があるが，櫓・塀・堀はない。南には大手口，北には岩崎口，西には新照院口があり，それぞれに御門があり，士番が任命されている。本丸は大手

第１図　鹿児島城跡位置図

口の上，二之丸は御下屋敷上の松林である。」と記されており，藩の認識として，鹿児島城跡は「山城」で，「本丸」「二之丸」は山城にあるとされていたことがわかる。

次に，鹿児島城が描かれた最も古い絵図である寛文10年（1670）「薩藩御城下絵図（鹿児島）」（鹿児島県立図書館蔵）では，城山（上山城）を背にして，北側曲輪を「大隅守殿居宅」，南側曲輪を「薩摩守殿居宅」としている。屋形（居館）の堀は東側のみが描かれ，薩摩守殿居宅の東堀側に面して北から多聞櫓，御楼門，塀，御角櫓が描かれている。「鹿児島城」の記載は城山に書かれており，城の中心は城山であるという意識がうかがえる。城山には複数の建物が描かれ，城山への登り口である現在の大手口に「大手門」が描かれる。また，北側曲輪前面には，武家儀礼である犬追物が行われる「犬追物馬場」が描かれる。

続く絵図として，元禄９年（1696）「鹿児島城絵図控」や宝暦６年（1756）「薩摩国鹿児島城絵図」があるが，これらの絵図でも本丸・二之丸は城山山頂に，大手口は城山の麓にあり，「城山が城の中心である」という「鑒察使答問抄上」の記載を裏付ける。

（２）元禄の大火と「明地（火除地）」の設置

鹿児島城下では，度々火災が起こっており，文献に記載のあるものだけで26件確認できる（鹿児島県立埋蔵文化財センター2021）。特に，元禄９年（1696）の大火は，鹿児島城全体に大きな影響を及ぼした。

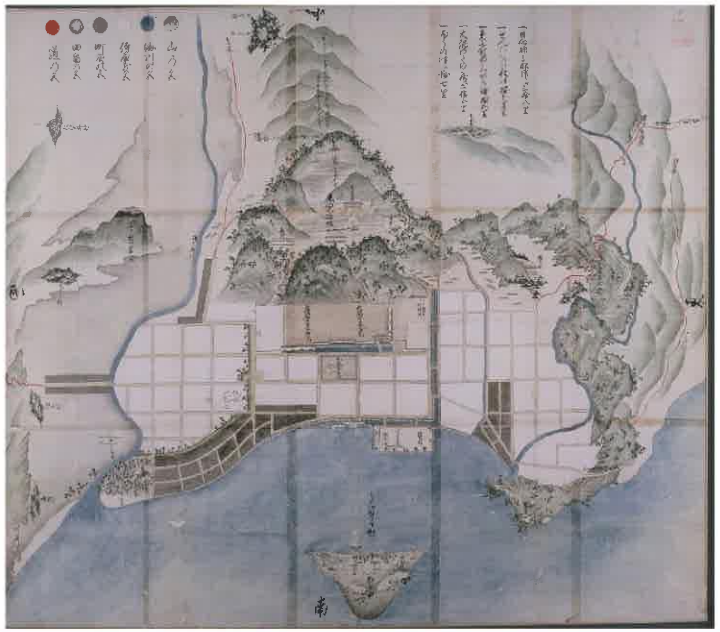
城下の度重なる火災のため，正徳３年（1713）に，本丸・二之丸の前面の区画を城への延焼を防ぐための火除のための明地（火除地）と定め，その旨を幕府に願い出ている（「鹿児島城絵図差出一件」東京大学史料編纂所島津家文書蔵，等）。また，明地（火除地）のほかにも城下の要所に火見櫓等を設け，城下の防災に努めている。

（３）江戸時代中後期の鹿児島城

江戸時代中期以降は，麓の屋形（居館）が鹿児島城の中心となり，藩主の居館や藩庁として機能及び敷地や施設が拡充された。

第４代薩摩藩主島津吉貴～第７代藩主重年の代には，家格の固定化や武士身分の引き締め，「方限」による城下の区画，稚児教育の強化など藩政が充実する。その中で，鹿児島城跡では，門や各諸設・建物等の呼称の決定や改称の記載が増加する。城山が美称で鶴丸山と呼ばれるのもこの頃からと考えられる。また，麓の屋形（居館）では本丸の御角櫓や石垣の修復，南泉院・東照宮の造立などが進んだ。

第８代薩摩藩主島津重豪の代になると，天明５年（1785）に御下屋敷側の山下



①寛政10（1670）年頃
「薩摩御城下絵図（鹿児島）」鹿児島県立図書館蔵

②元禄9（1696）年
「鹿児島城絵図控」島津家文書
東京大学史料編纂所蔵

③正政3（1713）年
「鹿児島城絵図差出一件」（部分）島津家文書
東京大学史料編纂所蔵

④宝暦6（1756）年
「薩摩国鹿児島城絵図」島津家文書
東京大学史料編纂所蔵

第２図　絵図に描かれた鹿児島城跡①

御用屋敷を合わせて二之丸と呼称するように定め（「島津家列朝制度　巻之三十六　御城内御殿内」『藩法集８　鹿児島藩(下)-2579』），本丸北側にあった旧二之丸から旧御下屋敷に二之丸殿舎の中枢が移された。この後，御台所や二之丸御庭庭園の普請，旧二之丸の本丸外御庭としての整備，二之丸南端に役所機能をもつ曲輪の設置など大規模な整備が行われる。さらに重豪は，鹿児島城全体の整備を進め，安永２年（1773）以降になると，防災のために設置された二之丸前面の明地（火除地）に聖堂・医学院・造士館（藩校）・演武館（武術道場，犬追物馬場も設置される）・諸役屋敷（御記録所・寺社奉行所・町奉行所等の役所）を創設するなど，屋形（居館）周辺の施設等を拡充した。こうした様々な事業や人材育成が幕末の薩摩藩の近代化を進める基礎となっていった。

第 10 代薩摩藩主島津斉興の代になると，文化７年（1810）に御楼門橋が板橋から石橋に建て替えられ（「一月七日　島津斉興伺書」『鹿児島県史料旧記雑録追録 7-1075 号』），天保 14 年（1843）～弘化元年（1844）には御楼門が建て替えられた（「某日記」『鹿児島県史料　島津斉宣･斉興公史料-443 号）。また，本丸の庭園（築山・御池）もこの時期に造営された。

第 11 代薩摩藩主島津斉彬の代になると，嘉永４年（1851）に「御城内動植館内花園（外御庭）に精錬所及び反射炉雛形を制作」（「上杉家旧臣宮島誠一郎秘蔵齊彬公御詠歌及書類」『鹿児島県史料　斉彬公史料１巻-202 号』），安政４年（1857）に「鹿児島城御本丸御休息所より二之丸探勝園御茶屋まで電信を引く」（「新納久仰上申書外夷処分云々（嘉永五年）六月二日」『鹿児島県史料　斉彬公史料１巻-204 号」）といった近代化のための実験等が行われた。斉彬は，外御庭，御台所跡を生活拠点としつつ，天保通寶や琉球通寶の鋳造実験や蒸餅，ビスケット作りのほか，焼き物やガラス製造等の試験運用を行うなど，集成館事業の実験を行っていた。

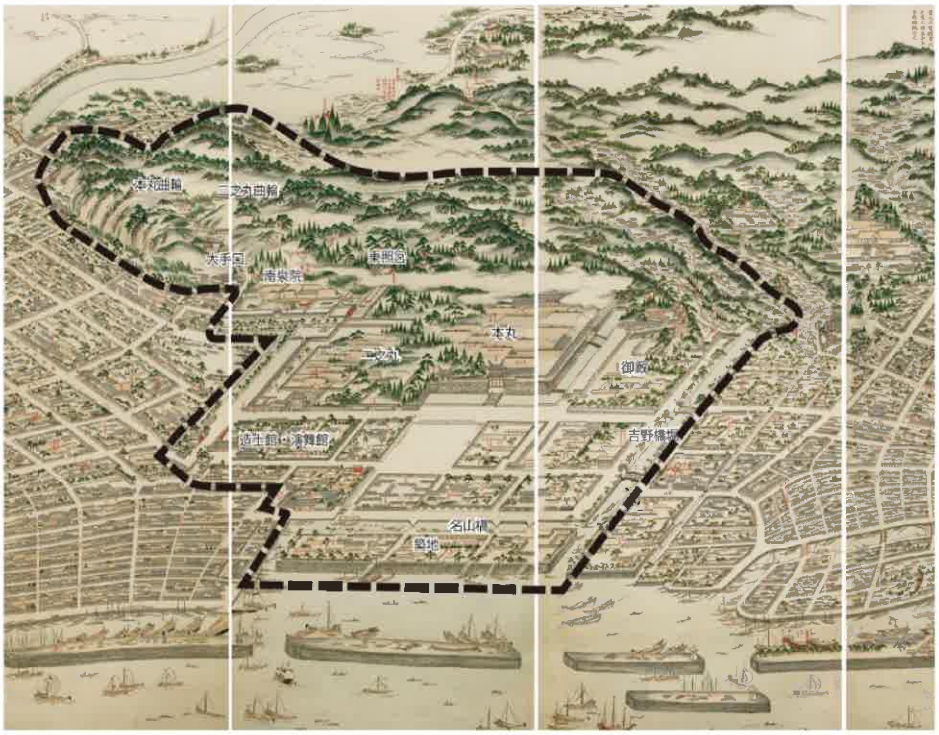
第 12 代薩摩藩主島津忠義の代では，国父島津久光が二之丸に入ることになった。文久３年（1863）には，薩英戦争により城山から本丸，二之丸まで被害を被っている（「戦争中敵弾来レル箇所」『鹿児島県史料　忠義公史料２巻-433 号』）。

天保 14 年（1843）「天保年間鹿児島城下絵図」（鹿児島市立美術館）には鹿児島城下町全体の諸施設が名入りで描かれており，重豪の整備以降の城下町の様子がわかる。また，明治６年（1873）「鹿児島城屋形及びその周辺図」では，鹿児島城域の施設が詳細に描かれており，城内の最終段階の施設配置がわかる。また，18 世紀後半頃の絵図から，麓の屋形（居館）に本丸・二之丸が描かれるようになり構図の中心にもなる一方，城山（上山城）は山として描かれることが増え，城山内の施設は一部を除き描かれなくなる。屋形（居館）の機能充実に伴い，城山と屋形の役割や「鹿児島城」としての認識も変化したと考えられる。

⑤天保 14（1843）年
「天保年間鹿児島城下絵図」鹿児島市立美術館蔵

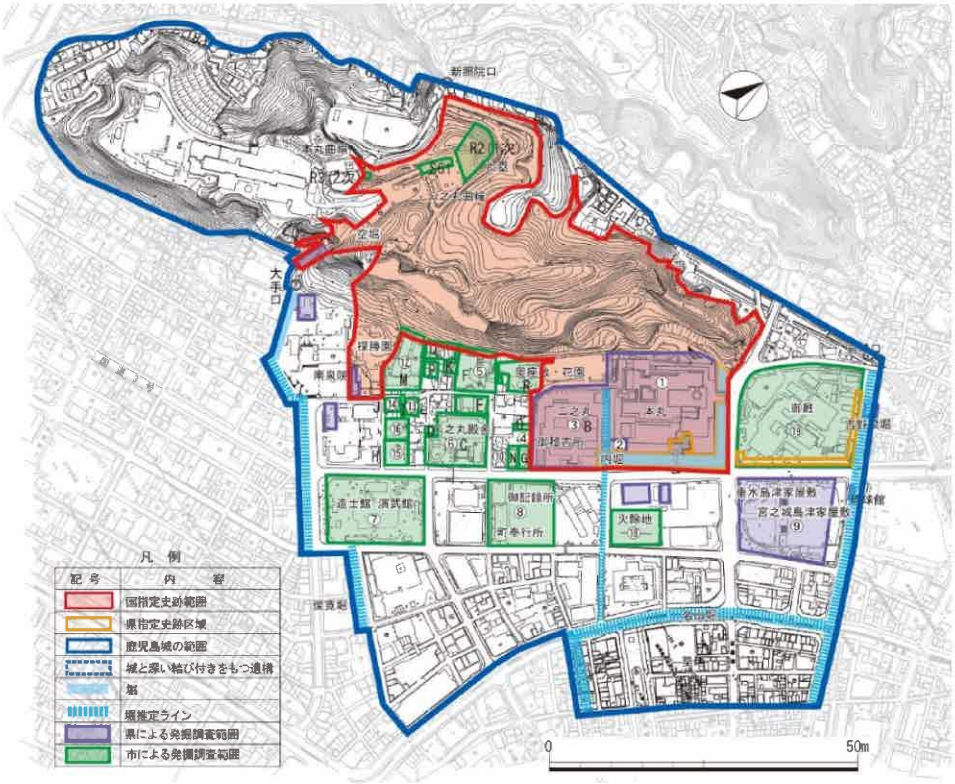
⑥明治６（1873）年
成尾常矩「鹿児島屋形及びその周辺図」（部分）鹿児島市立美術館蔵

第３図　絵図に描かれた鹿児島城跡②



第４図　江戸時代後期の鹿児島城跡

鹿児島城下絵図屏風（玉里島津家資料）（鹿児島県歴史・美術センター黎明館蔵）を一部改変



第５図　現在の鹿児島城跡

（出典：鹿児島県立埋蔵文化財センター2022b）

第６図　鹿児島城跡全景（北東から）

（４）近代の鹿児島城

鹿児島城には，明治２年（1869）に知政所が置かれたが，同４年には鎮西鎮台第二分営が設置され，政治拠点としての役割を終えた。明治天皇の行幸があった明治５（1872）年の古写真では，城の建物はほぼ完全な形で維持されており，鎮西鎮台第二分営は鹿児島城の建物をそのまま使用していたようである。明治６年（1873）『全国城郭存廃ノ処分並兵営地等撰定方』の段階でも，鹿児島城は「存城」と位置づけられ，引き続き軍事施設として利用されていた。しかし同年，本丸跡の建物は失火により焼失した（国立公文書館,「公文録・明治六年・第三十八巻・明治六年十二月・陸軍省伺下」）。

明治７年（1874）には，西郷隆盛が御厩跡に私学校を設立した。その後，明治10 年（1877）に西南戦争が勃発すると，鹿児島城跡は，城下町をめぐる５～６月の戦いと戦争の最終段階である９月の城山攻防戦で戦場になった。

鹿児島城二之丸には，廃藩置県後も島津久光が居住しており，島津邸として使用されていたが，９月の城山攻防戦の際に政府軍の砲撃により焼失した（国立公文書館,「陸軍省大日記」-軍機要領之部明治 10 年９月 22 日）。

こうして藩政期の建物が焼失した鹿児島城跡には，一時的に兵営が置かれた時期もあったが，その後，教育施設や病院等が設立された。明治 41 年（1908），

大正 11 年（1922）鹿児島城跡の山城部分や本丸部分は「陸軍省元所属不用地」として払い下げられ，軍事拠点としての役割も終え「廃城」となった。

（５）現存する遺構等

鹿児島城は，明治六年（1874）の大火や明治10年（1867）の西南戦争，大正３年（1914）の桜島大噴火に伴う地震，第二次世界大戦によって多くの建物や石垣が失われ，近代以降に吉野堀，名山堀等の堀も埋め立てられ，その跡地は大部分が都市化している。

現在，南禅院跡である照國神社背後から城山に上る道は，一部改変されているが大手口から築城当時の本丸曲輪・二之丸曲輪のあった城山山頂へ行く道とほぼ同じルートを通っており，江戸時代の排水溝が現在も使われている。築城当時の二之丸曲輪と推定される城山展望台駐車場からドン広場を囲む大規模な土塁が残存している。土塁は，西南戦争の城山攻防戦の際に薩軍が本営として利用しており，明治十年戦役薩軍大本営跡の石碑が残る。その他，西郷洞窟や西郷隆盛終焉の地など城山一体には西南戦争関連の史跡が残る。

御厩跡（私学校跡）の鹿児島医療センターから本丸跡の黎明館，二之丸跡の一部である県立図書館にかけては江戸時代の石垣が残り，黎明館北東部の石垣には，鬼門除けの隅欠がみられる。また，御厩跡（私学校跡）と本丸跡御楼門付近の石垣には，西南戦争の銃弾痕・砲弾痕がみられる。特に，発掘調査で四斤山砲の破片が出土している本丸跡御楼門付近の石垣には，砲弾痕が多く残り，中には信管の一部が石垣にめり込んでいる状況を見ることが出来る。また，同館敷地内には，令和２年に復元された国内最大級の城門である御楼門が建ち，能舞台跡や一部の建物跡も植栽によって明示され，屋外展示に石橋など庭園の一部が移設されている。

第７図　県指定史跡　私学校跡石塀

No.	年号	西暦	主な出来事	出典
1	文治元年	1185	忠久，島津庄下司職に任命される。	旧記雑録（前編）1-93
2	建久７年	1196	島津家初代忠久，本牟礼城（出水市本牟礼）に入城したと伝えられる。	旧記雑録（前編）1-96
3	暦応４	1341	５代貞久，鹿児島郡司矢上高純の東福寺城（鹿児島市清水町多賀山公園）を下し入城する。	旧記雑録（前編）1-2115
4	嘉慶元年	1387	７代元久，大隅国守護職を襲封して，清水城（鹿児島市稲荷町清水中学校裏山）へ入城する。	文政五年鹿児島城絵図
5	天文19	1550	15代貴久，伊集院城（日置市伊集院町）より鹿児島に入城し，内城（鹿児島市大竜町　大龍小学校敷地内）を築造して居城とする。	文政五年鹿児島城絵図
6	慶長５	1600	関ヶ原の戦い	旧記雑録（後編）3-1169
7	慶長６	1601	上山城普請	上井経兼日記
8	慶長７	1602	初代藩主家久が鶴丸城の築城を始める（諸説あり）。	旧記雑録（後編）3-1660
9	慶長８	1603	家久，内城から鶴丸城へ入城する。	旧記雑録（後編）3-1789
10	慶長11	1606	楼門前板橋渡り初め	旧記雑録（後編）4-216
11	慶長14	1609	琉球を平定	旧記雑録（後編）4-553
12	慶長17	1612	御楼門柱立	不明
13	慶長18	1613	堺普請・蔵の柱立	旧記雑録（後編）4-1074
14	元和元	1615	幕府の一国一城令により，上山城を廃止する。	旧記雑録（後編）4-1280
15	寛永16	1639	城の櫓敷建替え・石垣の修補を行う。	旧記雑録（後編）6-65
16	慶安３	1650	大雨により鶴丸城が破損する。	旧記雑録（追録）1-330
17	寛文４	1664	鹿児島城石垣崩壊	旧記雑録（追録）1-1059
18	延宝５	1677	鹿児島城東北門破損、東北に新規建立願許可	旧記雑録（追録）1-1726
19	天和３	1683	二之丸建直し	古記　371～372頁
20	元禄９	1696	鹿児島大火により，鹿児島城へ延焼し，本丸（御楼門とも）が焼失，二之丸の一部等が焼失する。	旧記雑録（追録）1-2599～2601
21	宝永元	1704	鹿児島城，対面所，小番，大番所完成	旧記雑録（追録）2-1614
22	宝永４	1707	本丸再建工事完了	旧記雑録（追録）2-2196
23	享保12	1727	城下士居宅破損	旧記雑録（追録）3-1944
24	宝暦９	1759	普請方より出火し，奉行所や材木蔵が焼失する。	三州御治世要覧
25	明和３	1766	城下士居大雨のため崩壊	旧記雑録（追録）6-324
26	安永２	1773	造士館・演武館ができる。	旧記雑録（追録）6-1082
27	天明５	1785	25代重豪，二之丸を改修拡大する。それまで二之丸御門と呼ばれていた門を矢来御門（現在の県立図書館正門の位置）に改める。御下屋敷門と呼ばれていた門を二之丸御門（現在の市立美術館正門の位置）と改称する。	旧記雑録（追録）6-2196
28	寛政４	1792	二之丸の庭園を含む大工事が完了する。	列朝制度
29	文化７	1810	御楼門前の板橋を石橋に架け替える。	旧記雑録（追録）7-1075
30	文久３	1863	薩英戦争	旧記雑録（追録）8-432
31	明治２	1869	廃仏毀釈	忠義公史料　6-214の８
32	明治４	1871	廃藩置県。29代忠義は本丸を去り，鎮西鎮台第二分営が入る。	忠義公史料　7-135･162
33	明治３	1873	本丸，御楼門が焼失する。	玉里島津家史料　7-2176
34	明治10	1877	西南戦争。二之丸が焼失する。	鹿児島県庁日誌，黒木為楨日記
35	明治17	1884	〔県立〕中学造士館設立	旧記雑録（追録）8-1305
36	明治34	1901	〔官立〕第七高等学校造士館設立	
37	大正３	1914	桜島大正大噴火に伴う地震により石垣の一部崩落，翌年修復	
38	昭和20	1945	空襲により校舎全焼，石垣一部崩壊	
39	昭和27	1952	鹿児島大学文理学部全焼	
40	昭和32	1957	鹿児島大学医学部，鴨池町より移転	
41	昭和35	1960	石垣一部崩壊	
42	昭和49	1974	鹿児島大学医学部，宇宿町へ移転	鹿児島県史第六巻下
43	昭和53	1978	発掘調査（本丸跡・二之丸跡，昭和54年度まで）	鹿児島（鶴丸）城跡-御楼門周辺-
44	昭和55	1980	県立図書館移設（現県立博物館より）	鹿児島県史第六巻下
45	昭和58	1983	県歴史資料センター黎明館開館	鹿児島県史第六巻下
46	平成11	1999	御角櫓跡周辺発掘調査	鹿児島（鶴丸）城跡-御楼門周辺-
47	平成11	1999	御角櫓跡周辺石垣を一部積み替え	鹿児島（鶴丸）城跡-御楼門周辺-
48	平成27	2015	鶴丸城保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施（継続中）	鹿児島（鶴丸）城跡-御楼門周辺-
49	平成27	2015	本丸北側辺の石垣が一部崩落→令和２年度に修復	鹿児島（鶴丸）城跡-御楼門周辺-
50	令和２	2020	御楼門設立	鹿児島（鶴丸）城跡-御楼門周辺-

※出典は，『鹿児島県史料』の史料番号を記載

鹿児島城跡の土地利用の記録（本丸中心）